World Heritage News Letter

世界遺産ニュースレター　　2021年11月《vol.45》

撮影：平井広行

1　今夏の富士登山を振り返って

<静岡県スポーツ・文化観光部　富士山世界遺産課>

2　【静岡県富士山世界遺産センター　収蔵品展】

富士のことほぎ

3　<研究員コラム>

「家康＋富士山」展を開催して

<静岡県富士山世界遺産センター　学芸課教授　松島　仁>

静岡県富士山世界遺産センター

今夏の富士登山を振り返って

<静岡県スポーツ・文化観光部　富士山世界遺産課>

昨年は、富士山は開山されませんでしたが、今夏は、地元市町、山小屋組合、ガイド団体、交通事業者等関係者と連携し、新型コロナウイルス感染防止対策を行うことにより、約２年ぶりに富士山を開山することができました。

開山期間中、全国各地で緊急事態宣言やまん延防止等重点措置が発出されていたこと、８月に低気圧の影響で長期間に亘る天候不順が続いたことなどから、登山者は例年に比べ大幅に減少しましたが、大きな事故もなく閉山を迎えることができました。

登山口（須走口）での検温・体調チェックの様子

登山者へのアンケート結果によると、県内の３登山口のいずれにおいても、新型コロナウイルス感染への不安を感じることなく登山ができたと回答した割合が８割を超えるとともに、令和元年との比較において、混雑度や登山の満足度について大幅な改善がみられたことから、県が関係者と連携して取り組んだ感染防止対策が登山者の皆様から一定程度評価をいただけたものと考えています。

その一方で、来夏に向けて解決すべき課題も明らかになりました。

感染者の入山を防ぐため、マイカー規制乗換駐車場や登山口等で検温・体調チェックを実施しましたが、週末などの繁忙期に登山者が集中したことから、水ヶ塚駐車場では検温・体調チェック待ちの列ができ、密な状態も生じました。今後より効率的なチェック体制を構築するとともに、登山者を分散化するための有効な手段を講じていく必要があります。

また、豪雨や強風の中登山を強行したため、山小屋等で立ち往生する登山者が発生するなど、悪天候時における登山者への対応の必要性も浮き彫りになりました。登山者が登山の実施について適切な判断ができるよう、頂上や登山道等山中の気象情報を登山開始前に登山者に効果的に伝える仕組を作っていく必要があります。

さらに、コロナ禍の富士登山において遵守すべき事項を定めた「Withコロナ時代の新しい富士登山マナー」についても、マナーの内容まで理解できていた登山者は半数にとどまるなど、周知不足が明らかになりました。登山計画時や登山開始前などあらゆる機会を捉え、マナーの内容が確実に伝わるよう啓発に力を入れていく必要があります。

こうしたことから、10月上旬に関係者を集めて「来夏の富士登山に向けた検討会議」を開催し、これらの課題についての認識を共有するとともに、具体的な対策について意見交換を行いました。

今後、来夏の開山に向けて検討を重ね、今夏よりも更に安全・安心に登山ができるよう取り組んでいきますので、皆様の御理解・御協力をお願いします。

今夏の山頂付近の様子

静岡県富士山世界遺産センター　収蔵品展　「富士のことほぎ」

会場：静岡県富士山世界遺産センター２階　企画展示室
会期：令和4年1月1日（土・祝日）～2月6日（日）
概要：富士山は、日本一の高さを誇る山であり、崇高で美しいその姿から、縁起の良い画題として尊ばれてきました。その富士山を和歌や漢詩で言祝ぐ（ことほぐ）画賛は、まさに新春に相応しいおめでたさを備えています。本企画展では、センターの収蔵品の中から初春に相応しい慶賀性の高い画賛作品をセレクトし、富士山を描いた絵画と、その絵につけられた漢詩や和歌とによる典雅な世界を御紹介いたします。また、新収蔵の『竹取物語』の挿絵の富士山や、歌川国芳・磯田湖龍斎の浮世絵に描かれた富士、鏡や印籠（個人蔵）などのモチーフとなり日々の生活を彩った富士山など、おめでたさの象徴としての富士山を大公開します。

主な出品作：・土佐光貞画・日野資枝賛「四時富士山図」　《初出品》
・池田孤邨「富士松原図」　《初出品》
・歌川国芳「有卦福曳の図」《初出品》
・奈良絵本挿絵『竹取物語』　《初出品》
・印籠（個人蔵）

イベント：　1　特別講演会　2022年1月8日（土）14時～15時
藤沢茜氏（神奈川大学）「浮世絵に見る富士山ー信仰と憧れー」
2　公開講座　2022年1月16日（日）14時～15時
田代一葉（静岡県富士山世界遺産センター）「富士山の画賛を読む」
＊いずれもセンター研修室にて行います。
（事前予約制、定員30名、詳細はHPをご覧ください。）
3　ギャラリートーク
展示担当者が展示の見どころなどを解説いたします。
1/10（月・祝）、2/5（土）　各日14時～
予約不要、直接企画展示室にお越し下さい。（要観覧券）

土佐光貞画・日野資枝賛「四時富士図」一幅　絹本墨画
歌　「ふりそめし時よりいまに白たへのゆきをつねなる山はふじの根」

＜研究員コラム＞　「家康+富士山」展を開催して

＜静岡県富士山世界遺産センター　学芸課教授　松島　仁＞

静岡県富士山世界遺産センターでは、令和２年度に「富士三保清見寺図屏風」を収蔵しました。センターでは、この屏風に描かれた絵の意味を読み解いたうえ、徳川家康と富士山を同一画面に描いた興味深い作品として、ここに初公開いたしました。

本作は右隻に富士山と三保松原、左隻に清見寺を描きます。両隻を通じた構図は、伝雪舟や狩野探幽の作品と近く、富士山絵画の主要な型として知られてきました。

本作の右隻には、三峯型の富士山と三保松原を描きますが、通例の構図とは違ってあえて三保松原の付け根の部分―清水湊と現在の日本平を描きます。日本平の中腹には建物が描写されますが、五重塔を伴っていることと権現造の社殿が描かれていることから久能山東照宮と考えられます。ここではあえて構図をデフォルメしてまで神格化された徳川家康を祀る久能山東照宮が描かれているのです。

一方、本作の左隻には、頭巾をかぶった隠居風の人物が清見寺を訪ねる様子が描写されます。隠居風の人物は多数の従者を引き連れ、近くには豪華な網代駕籠や立派な体躯の黒毛の馬も控えています。清見寺の書院内には貴人を迎えるにふさわしく茶器もしつらえられます。そのためこの人物は、かなりの高位の者と想定され、隠居風の人物ということも考慮すると徳川家康を描いた可能性が考えられます。

本展覧会では、画中に徳川家康を描いたと推定される「富士三保清見寺図屏風」を初公開するとともに、関連史料を駆使しつつ、その背後に広がる物語―徳川家康と土屋忠直の出会いを読み解きました。

展覧会では共催いただいた公益財団法人徳川記念財団のほか、久能山東照宮、清見寺、日光東照宮、日光山輪王寺からご協力を賜り、徳川家康を描いた肖像画を一堂に集めました。そのなかには皆さんがよく見知った肖像――実は家康その人ではなく、あくまで神としての東照大権現のイメージ――のほか、家康生前の面影をリアルに伝える肖像画の下絵（紙形）や、神君家康から権力と権威を継承したのち家康と一体化した徳川家光の肖像、家光の夢のなかに現れた家康の姿を狩野探幽に写させた画像など、特別な環境のなかで制作・享受された少し風変りな作品も含まれます。

本展覧会を通し、江戸時代における富士山と徳川将軍の関係、両者が合わせ描かれることの意味を再認識していただけたとしたら、嬉しく思います。

「富士三保清見寺図屏風」